平和への道　空爆下から　第2部

広島原爆①

えひめ　戦後70年

亡くした娘　面影今も

居間の飾り棚の中で、もえぎ色の着物を着てほほ笑む少女の人形に梶野清子(94)＝松山市＝は優しいまなざしを向けた。長女の広子がそこにいるような気持ちになる。70年前の8月6日、広島で被爆した時も、蒸し暑い家の中で広子と一緒にいたことを思い返す。「きょうは原爆の日よ」。独り言なのは分かっていて、続けた。「両隣も、向こうの家も焼けて、かあちゃんはあんたを抱っこして、そこを抜けていったんだよ」

つやのある黒髪にふっくらとした頬、かわいい目。30年ほど前、清子は松山市内の百貨店でその人形を見掛けた時、しばらく動けなかった。原爆で亡くした広子と雰囲気がうり二つ。迷わず買って、家に連れて帰った。誰もいない部屋で自然と話し掛けると、心がすっと軽くなった。

広子を抱いて逃げたあの日、おなかの中には長男の剛がいた。剛は病気を抱えながら懸命に生き、35歳で亡くなった。忘れ形見の男児が今は40代になり、2人の子どもらを連れて、今夏のお盆も訪ねてきてくれた。にぎやかな雰囲気に包まれながら、剛が生きていたら、と思った。

被爆してから、清子は半日動けば疲れ切り、横になって休む暮らしを続けている。平穏な日々の中で、原爆へのやり場のない怒りや悲しみを少しずつ心の奥底にしまってきたが、忘れることはない。「いつも十字架をおぶっているようなものね」

◇　◇

第2次世界大戦末期、参戦国による無差別爆撃の応酬の末、米国が広島と長崎に原爆を落とした。連載「空爆下から」第2部では、被爆後、松山に移り住んだ1人の女性の歩みをたどりながら、原爆投下の罪深さをあらためて見つめる。

（敬称略、中田佐知子）

（4面に続く）

原爆で亡くした長女とよく似た人形を見つめる梶野清子。「その日あったことをね、自然とおしゃべりしてるんです。独り言ですけどね」＝22日午前、松山市

愛媛新聞 :朝刊 2015/08/24 面名:総一 ページ:001

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。